The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	北村季吟の古典学に関する基礎的研究
Author(s)	宮川, 真弥
Citation	大阪大学, 2017, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/61411
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　宮川　真弥　）	
論文題名	北村季吟の古典学に関する基礎的研究

論文内容の要旨

北村季吟（一六二五―一七〇五）は近世前期の古典学者であり、『湖月抄』や『春曙抄』などの著名な注釈書を公刊した人物である。季吟の注釈書は近世期を通じて、明治時代に至るまで広く流布しており、古典本文の流布本の地位を占めていたものもある。前掲二著はまさにそれに該当する。賀茂真淵や本居宣長のような国学者も、季吟の注釈書に多数の書き入れをしていたことが知られている。このように、季吟の古典学の結実である注釈書が、近世期から近現代に至るまでの長期間、京都・江戸から地方までの広範囲に流布し、後世の古典理解の基礎となった点に大きな価値を見出されている。

そのような状況にあるが、あるいはそのためというべきか、従来、季吟の注釈書に関して、流布の広さゆえに公刊物に注目が向かい、写本類や季吟が記した秘説や家伝の説というべき伝授書についてはなかなか顧みられることがなかった。季吟の古典学は中世以来の古典学の最末流に位置づけられており、季吟の注釈書までを「旧注」、それ以降の注釈書を「新注」と区分するのが一般的である。従来、季吟の注釈書に関してはその享受層の広範性を指摘されながらも、たとえば小高敏郎氏が「安易な諸注集成に止まつていて甚だ物足りない」（『松永貞徳の研究 続編』、至文堂、昭31・6）と批判的に述べるように、内容については先行する諸注釈書を要領よく集成しただけのものとされ、さほど評価されてこなかった。

季吟は、古典学が師資相承によって形成されていた中世期と、古典学の成果が広く一般に提供された近世中後期との過渡期に生きた古典学者であり、古典学史を考える上では看過できない人物である。

本稿では、板本に加え、写本や伝授書の検討も行い、総合的な観点から、従前の季吟像の克服を目指した。

従来検討不十分の資料を検討対象の中心に据え、書誌学的研究を軸として、注釈書生成の方法論と場とを考究することが、本稿の各章には通底している。

第一部では主として季吟『枕草子春曙抄』を対象とした。

北村季吟『枕草子春曙抄』（延宝二年〈一六七四〉七月成立〈自跋〉）（以下、『春曙抄』と称する）は、明治に至るまで複数の書肆によってたびたび刷行され、『枕草子』の流布本的位置を占めた注釈書である。

『春曙抄』の諸本については、既に野村貴次氏、荒滝雅俊氏 、山崎正伸氏の研究があり、覆刻版の存在や、季吟自身によって数次の修訂が行われたことなどが確認されている。しかし、諸本の関係や系統が十分に明らかになったとはいえず、いずれの伝本を初版初印と認めるかについても説が分かれている。

そこで、第一部第一章では、主として匡郭縦寸と本文異同との比較調査により、『春曙抄』の諸本系統を明らかにすることを目的とし、併せて覆刻が行われた経緯や、書肆間での板木の移動の様相、及び、各書肆の板木の利用状況についても検討した。また、本文異同と匡郭高の比較によって、原版と覆刻版とが存在し、後に入り混ぜられて刷行されるために混態を生じていることを指摘した。

第一部第二章では、板本への修訂から、類書の利用実態について検討した。

早印本では「円機活法云、相鶴経云、声聞天故頭赤、食於水、故啄長、云々」とあるのに対して、後印本になると注記冒頭の「円機活法云」が削られ、空格となる現象が見られる。『春曙抄』の漢籍関連注記全体を見渡し、漢籍関連注記における『円機活法』『事文類聚』両類書の利用を指摘した。その上で、先の修訂の持つ意味と、そこから推定されうる諸事象とについて検討を加えた。

第一部第三章では、『徒然草文段抄』所引『枕草子』を手がかりに、『春曙抄』の本文作成の過程に迫った。そして、これは季吟の板本観を窺う用意でもあった。

第二部では季吟の源氏学を対象とした。

第二部第一章では、従来、北村季吟が師の箕形如庵の講釈を記したものであり、『湖月抄』（延宝元年（一六七三）跋）以前に成立し、『湖月抄』に影響を与えた季吟自筆草稿とされてきた天理図書館蔵『源氏物語打聞』（以下、『打

聞』と称する）が、季吟の影響下で『湖月抄』に対して施注されたものであり、『湖月抄』以後の成立であることを示し、季吟の孫・季任の筆と推定されることを述べた。

併せて、『打聞』が季吟とその後裔の古典学の様相を窺う上で重要であることを指摘し、季吟の後裔である湖春や正立、湖元、季任の奥書などを有する諸資料を参看することにより、北村家における古典学の実態について言及した。

季吟らによる講釈の場において、季吟注の板本がテキストとして、いわば教科書のように用いられていたことを指摘し、季吟の伝授書にしばしば季吟注の板本を参照すべき指示が見えることを裏付けとして用いた。

季任筆である『打聞』の施注対象が板本『湖月抄』であったことと、『打聞』紙背文書『伊勢物語』注釈の施注対象が板本『伊勢物語拾穂抄』であったことは、季吟の跡を継ぎ、歌学方となった湖元が季吟書入板本『大和物語抄』を保管し、柳沢吉里に伝えていたことと併せて示唆的であり、彼らの注釈活動の対象が既に古典そのものではなく、季吟注へと移っていたことが推測され、これは季吟の注釈活動や、湖春が『教端抄』において注釈の対象としたものが『古今集』そのものであったことと好対照をなすことを指摘した。

第二部第二章では、季吟の奥書がみえる『源語秘訣』の諸本調査を行い、奥書から季吟の源氏学の師・箕方如庵が古活字版『徒然草寿命院抄』の開版者「如庵宗乾」と同一人物であることを指摘し、季吟とその父祖の交流圏について述べた。

本章では北村季吟筆と伝える九大本『源語秘訣』が臨模本であり、季吟自筆とは認めがたいことを述べた。また、季吟に関する『源語秘訣』諸伝本について報告を行った。

さらに、従来未詳とされてきた季吟の源氏学の師・箕形如庵が、『徒然草寿命院抄』などの開版者である「如庵宗乾」と同一人物であることを指摘した。それに伴い、北村宗龍、箕形如庵宗乾、秦宗巴といった医師らの交流圏を想定し、季吟の婚姻や師弟関係への影響を推定した。これらは、『湖月抄』の「師説」成立の時期や、季吟の出版に対する意識などにも関係してくる。これまで季吟の医師らとの交友は見過ごされがちであったが、今後はより一層の考究を求められよう。

第二部第三章では、季吟『源氏物語微意』（以下、『微意』と称する）の基礎的研究を行った。日本大学図書館蔵『源氏物語微意』の分析を中心に、季吟の源氏学に関する資料について、包括的に検討した。

『微意』の授与の過程について、川上本『古今拾穂抄』には元禄十二年十二月二十九日に、『古今拾穂抄』を『教端抄』と改名して「五丸様」に献上した旨が記される。つまり、吉保への初度の古今伝授の際には既に『教端抄』は成立しており、吉保に伝えられていたものと考えられる。そして、日大本『教端抄』によれば、元禄十四年から翌十五年にかけて再度の書写を行ったことが記されており、川上本と比較するに本文の改訂が行われていることが知られる。そのため、再度の古今伝授の際に改めて不審を尋ねる機会が設けられたのではないだろうか。また、『十如是和歌集』は奥書に「八半之小本」などと記すことから推すに、はじめは伝授書ではなかったのではないかと指摘した。

第一部第二章において、板本『春曙抄』の修訂で『円機活法』の名が抹消される事例を指摘した。その一方で、天理本『埋木』に合綴される「誹諧会法」の「追考」には、『円機活法』の名が明示されることも示した。その事例と同様に、板本『湖月抄』中には「抄」などとのみ記す『岷江入楚』について、伝授書『微意』中にはその名を記している。これらのことは、板本では全てを明らかにしなかった手の内を、伝授書においてはこだわりなく見せていることを示しているといえよう。板本と伝授書での季吟の態度の差が窺える好例である。

『源氏物語』の年立では一条兼良の旧年立と本居宣長の新年立が著名である。この二者の間で乙女巻と玉鬘巻との接続の捉え方に相違があることはよく知られている。旧年立が玉鬘巻を乙女巻第三年の翌年と見るのに対して、新年立は同年のことと見るのである。そして、新年立の見解が既に『湖月抄』に示されていたこともまた知られるところである。『湖月抄』の「一説」は、新年立同様、玉鬘巻を乙女巻第三年の同年とする。そのために生じた旧年立との一年のずれを、『湖月抄』の「一説」は真木柱巻の末に一年を加えることによって、新年立は帚木巻から乙女巻までを一年ずつ繰り上げることによって、それぞれ解決したのである。この一説が季吟自身の説であることを『微意』の注記から明らかにした。

『湖月抄』に「細」との肩付で引用される注記は、実際には『明星抄』からの引用であることを三浦尚子氏が明らかにしているが、ここでさらに、その引用が板本『明星抄』によるものであることを指摘した。

『湖月抄』の主底本は板本『絵入源氏物語』慶安本であった。『春曙抄』の主底本は、鈴木知太郎氏が指摘するように、『磐斎抄』との共同原拠本が想定されるが、その共同原拠本は慶安板本を主底本としている。板本『明星抄』の利用を踏まえるに、これらの事象は、板本が書き入れに便利であるということを超えて、板行された古典本文に対する季吟の信頼を表しているものと考えられる。『湖月抄』においても、信頼しうる古典本文を提供しようとする季吟の意図を読み取ることができよう。そのことは北岡文庫本『源氏物語』や『打聞』の存在が示唆するところである。

（3886字）

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（宮　川　真　弥　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　大阪大学　教授	加　藤　洋　介
	副 査　大阪大学　教授	飯　倉　洋　一
	副 査　大阪大学　特任講師	勢　田　道　生

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　北村季吟の古典学に関する基礎的研究

学位申請者　宮　川　真　弥

論文審査担当者

主査　大阪大学教授　加　藤　洋　介

副査　大阪大学教授　飯　倉　洋　一

副査　大阪大学特任講師　勢　田　道　生

【論文内容の要旨】

本論文は、江戸時代前期の古典学者である北村季吟（一六二五～一七〇五）を対象として、諸資料を検討することによって、古典学者としての新たな季吟像を提示することを目指そうとするものである。（400 字詰原稿用紙換算約 400 枚、別途翻刻資料等を約 400 枚分付す）

第一部は北村季吟による『枕草子』注釈書である『枕草子春曙抄』（以下『春曙抄』と略称）を扱う。第一章では、これまで諸本系統が明らかではなかった『春曙抄』について、本文異同と匡郭高の比較によって、原版と覆刻版が存在すること、およびその両者が混在した版が生じていることを指摘する。第二章は、『春曙抄』における類書『円機活法』『事文類聚』利用の実態について検討し、「円機活法ニ云ク」との出典削除がその利用の事実を隠匿するために行われたものと推測する。第三章では、北村季吟『徒然草文段抄』に引用された『枕草子』本文に着目することによって、『春曙抄』が『枕草子』本文を作成する際、「原拠本」に加えて加藤磐斎『清少納言枕草子抄』および三巻本を使用していたことを示す。

第二部は北村季吟による『源氏物語』関係の注釈書を扱う。第一章では天理大学附属天理図書館蔵『源氏物語打聞』を取り上げ、季吟の源氏学の師・箕形如庵の説を聞き書きした季吟自筆の書であり、季吟の代表的な業績である『源氏物語』注釈書『湖月抄』に先行するものとの先行研究に対し、『湖月抄』以後の成立と見るべきこと、季吟の孫・季任の書写にかかること、内容も『湖月抄』読解に資するためのものとの見解を提示する。第二章は季吟の奥書を備える『源語秘訣』諸本の調査から、季吟の源氏学の師・箕形如庵が、従来伝未詳とされてきた古活字版『徒然草寿命院抄』の開版者「如庵宗乾」と同一人物であることを指摘し、季吟とその父祖の交流圏についても言及する。第三章は日本大学図書館蔵『源氏物語微意』に関する書誌解題、『源氏物語微意』と『湖月抄』との関係、季吟およびその周辺の源氏学に関する資料などについて包括的に検討する。

附章として、日本大学図書館蔵『源氏物語微意』翻刻、『古今集并歌書品々御伝受之書』奥書一覧、附表として『源氏物語微意』・『湖月抄』（板本）・『集成』（『源氏物語湖月抄』北村季吟古註釈集成）・『増註』（猪熊夏樹補註、有川武彦校訂『増註　源氏物語湖月抄』）・『大成』（池田亀鑑編著『源氏物語大成』）対照表を巻末に付す。

【論文審査の結果の要旨】

本論文における検討は、各地に散在する諸資料を丹念に調査し、時間と労力を要する検証をもとに実践されたものであり、各編の論証には一定の安定度が確保されていると認められる。そのことはたとえば第二部第一章において、天理大学附属天理図書館蔵『源氏物語打聞』の注記を『湖月抄』と丹念に比較することによって、従来の指摘とはまったく逆に、『源氏物語打聞』の成立が『湖月抄』に遅れることを明解に示すことに成功していること、また季吟とその孫の季任の筆跡を詳細に比較することによって、季吟自筆草稿説を否定した上で季任筆によることを実証して見せたことによく現れていよう。また第二部第二章においては、季吟関係の『源氏物語』関係資料を追尋する過程で『源語秘訣』の奥書に季吟の名前を見出し、そこに記された「如庵宗乾」なる人物が、従来伝未詳とされてきた季吟の源氏学の師・箕形如庵であり、しかも秦宗巴『徒然草寿命院抄』を出版していることと結びつけられたことは、文学史に新たな知見を加える発見として高く評価できるものである。第二部第三章で紹介する『源氏物語微意』も、これまで活字で紹介されたものがなく、今後の研究の展開を押し開いてゆく契機となるものであろう。

しかしながら学問的方法において一貫しているとは言え、本論文の第一部と第二部では内容面での連続性をほとんど窺うことができない。対象が『春曙抄』と『源氏物語』関係の注釈書というように異なるだけではなく、本論文が目指すところの古典学者としての新たな季吟像を見出すことに成功していない所以である。第一部第一章の内容も労作であることは認められるものの、原版と覆刻版を峻別する方法を、他作品にも実践して検証した成果を明示すべきであろうし、注釈書としての『春曙抄』を評価するためには、さらに異なる研究上のアプローチが必要であろう。北村季吟の古典学の範囲は相当に広く、『春曙抄』と『源氏物語』以外にも研究領域に取り入れるべき対象が多く残されている。

以上のような問題点はあるものの、本論文が北村季吟の古典学に関する新たな知見を提示し、学界に寄与する内容を含むことは、十分に評価できるものと思われる。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。